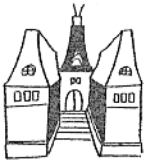


阪大・ノッチングム大学合同シンポジウム



海外交流

辻 裕*

Osaka University-University of Nottingham Joint Symposium

Key Words : University of Nottingham, Joint Symposium, International Exchange

標記シンポジウムの第3回目が平成9年9月1日から9月3日の間、大阪大学において行われました。ノッチングム大学と阪大は1991年(平成3年)に部局間協定を結んでいます。1998年1月現在、阪大は海外の19の大学と大学間協定を結び、部局間協定に至っては121校に及びます。しかし両校間または部局間で定期的なシンポジウムを実施するような形での交流は一般に少ないかと思われまます。以下に第3回シンポジウムを中心にこれまでの経緯を含めて本合同シンポジウムの報告を行います。他の大学との交流に関連して参考になれば幸いです。なお本稿は大阪大学学報1997年11月号(No.525)に寄せた原稿に一部加筆してここに転載していることをお断りします。

シンポジウムの沿革：

本シンポジウムの第1回目は森田善一郎名誉教授(工学部・材料系)の音頭のもとで1993年(平成5年)9月竣工間もない阪大吹田キャンパスの材料開発・物性記念館において行われました。ノッチングム大学の世話役は材料系のJ.

W. Wood教授で、テーマも参加者も材料系が主に中心でした。このシンポジウムにおいてシンポジウム開催が両大学の研究者にとってきわめて有意義であることが認識され、その結果、開催場所を両校間で交互に変えて隔年ごとに開催することが決まりました。そして第2回(1995年)がノッチングム大学で開催されました。ノッチングム大学側では上述のJ. W. Wood教授、阪大では大中逸雄教授(工学部・材料系)が世話に当たりました。第2回目では幾分分野を広げ、材料の他に機械、建築、土木、物理、化学を専門とする研究者や企業からも参加がありました。筆者を含め第2回目のシンポジウムで初めてノッチングム大学を訪れた阪大関係者が多くいました。イギリスの伝統校の常ですが、緑豊かな落ち着いたキャンパスに感銘を受けたことが思い出されます。第2回目のシンポジウムに関しては大阪大学学報(No.501, 381ページ)において簡単な紹介があります。第2回目のシンポジウムの後しばらくしてノッチングム大学工学部長のB. R. Clayton教授が阪大が訪問し、当時の工学部長・鈴木胖教授とも会われ、阪大との交流の今後の発展にノッチングムとしては大きな期待を寄せていることを述べられました。

第3回の経過と特徴：

第3回のノッチングム側世話役は当初J. W. Wood教授でしたが、途中から化学工学科のB. J. Azzopardi教授に変わり、実行委員会が以下のメンバーで構成されました。

辻 裕(機械), B. J. Azzopardi(ノッチングム),

*Yutaka TSUJI

1943年6月20日生

1966年大阪府立大学・工学部・

航空工学科卒業

現在、大阪大学工学研究科、機械

物理工学専攻、複雑流体力学講座、

教授、工学博士、粒子複雑系

TEL 06-879-7315

FAX 06-879-7315

E-Mail tsuji@mech.eng.

osaka-u.ac.jp



白井泰治(材料), 古城紀雄(留学生センター), 新原皓一(産研), 野城 清(接合研), 大倉一郎(土木), 大野義照(建築), R. Ocone(ノッチングム)…敬称略

過去2回のシンポジウムでは、阪大、ノッチングム大学で講演募集を同時に行い、講演も全体会議方式でした。この方式では他の分野の研究も聞けてそれなりに利点もありましたが、内容によっては専門外の人にとって理解が困難で討論に参加できない欠点もありました。そこで第3回目では、お客様であるノッチングム側から講演内容をあらかじめ知らせてもらい、それを受けて阪大内で同様のテーマ研究者に講演を呼びかけました。この方法のねらいは講演会で実質的な討論が展開されることにありますが、これによって大学らしく研究をベースにした交流が行われる結果になったと自負しています。従って第3回目では当然のことながら全体会議方式は取らず、阪大、ノッチングム双方の講演が集まった段階で、似通った内容のものを集めるパラレルセッション方式で実施されました。少し残念であったのは、2回目で広がったはずの分野が、3回目ではむしろ減った結果になったことです。この理由は、日本からイギリスへ行く場合とイギリスから日本へ来る場合では、やはり後者の方が容易でないことによると思われる。第3回シンポジウムの計画当初から旅費や滞在費に関してホスト側はゲストに対し特別な援助を行わない方針を決めておりましたので、ノッチングムからの参加者が8人と第2回目の時の日本側の参加者14名に比べて少なくなりました。ノッチングムからの発表が材料と機械・化学工学のものであったことを受け、阪大の参加者の多くもその関連の学科(応用理工学科)や研究所(接合科学研究所)からの人が中心となりました。平成9年度から材料系と機械系の6学科が合併して応用理工学科が発足していますが、はからずも第3回シンポジウムは、その応用理工学科の最初のイベントになった感がありました。両校には他の多くの分野で優れた研究者が多数活躍していることはいうまでもありません。材料系から生まれたシンポジウムが自然と他分野に広がれば、これは両校間にとっ

て望ましいことでしょう。

プログラム:

3日間のプログラムは以下の通りです。

- 9月1日(月) 夕刻より登録とレセプション(千里阪急ホテル)
- 9月2日(火) 講演会(銀杏会館), 懇親会(阪大病院内スカイレストラン)
- 9月3日(水) 午前: 阪大研究室の自由訪問, 午後: 研究所見学(住友金属, ホソカワミクロン)

両工学部間のシンポジウムですが、研究テーマが近い人たちが集まるように企画されたシンポジウムであるので、初日のレセプションから参加者の懇談は多いに盛り上がりました。9月2日のオープニングセッションでは城野政弘工学部長の歓迎の挨拶に続き、ノッチングム大学学長からの親書をB. J. Azzopardi教授が読み上げました。講演論文の総数は39件、内ノッ



2-1



2-2

チンガムから12件、阪大から27件でした。論文の具体的なテーマは、形状記憶合金、メカニカルアロイング、焼結、濡れ性、複合材料、材料組織、プロセス、気液二相流、粒子流、光学計測、乱流などです。講演は2部屋で併行して行われ、阪大在籍者だけでなく近畿大学、住友金属、塩野義製薬などからの発表もありました。参加登録した人々の総数は72名でした。約280ページからなる論文集を100冊印刷しましたが、聴講に来た学生にも論文集を配布したため、終わってみれば残部ゼロとなりました。

懇親会は応用理工学科長・馬越教授の挨拶で始まり、乾杯の音頭はシンポジウム生みの親である森田名誉教授に取っていただきました。今回のシンポジウムを支援したホソカワミクロン会長・細川益男氏や国際交流課の鈴木課長ら国際交流に関わる阪大職員も加わりました。3日目午前の研究室訪問では、ノッチンガムの人たちは各自自由に自分に興味ある研究室や実験室を訪問し、さらに親交を深めたと思われます。

午後の近隣企業の研究所訪問はノッチンガムの人たちのために企画されたもので、2グループに分かれて実施されました。

第4回目は1999年にノッチンガム大学で行われる予定です。阪大側の世話役は接合科学研究所の野城清教授にバトンタッチされます。

謝 辞：

このシンポジウムはホソカワミクロン(株)から経済的な支援を受けました。そのおかげで論文集印刷、レセプション、懇親会の費用の殆ど全てをまかなうことができ、参加者に登録費を徴集することなく実施できました。同社に対して深く感謝の意を表します。

接合科学研究所の事務補佐員の堀江登志子さんには受付その他で大変お世話になりました。また機械物理工学専攻の新見知子事務官にも多くの作業を手伝っていただきました。ここに改めてお礼申し上げます。

